

3. 調査の概要

8市の調査は「安全緑地・模範例集」として別冊にまとめています。ここでは、各市の調査の中から主なものを紹介します。(五十音順)

1) 稲城市



セットバック。全面舗装ではなく、わざと土の部分を残している。市で管理すべきだという声もあるが、そこをうまく活用している方が圧倒的に多い。



見通しのよい角地。竹垣の中は和、外は洋なのにあまり違和感がない。鉢植えを介して道行く人との会話も弾むに違いない。

2) 国立市



国立の安全緑地の模範例。外構デザイン、植栽の選定などセンス良くまとまっている。いつも花木の手入れが行き届いていて通りたくなる道。



大学通り。道際の1m～1.5mを低い植込みにしている道沿いガーデン。狭い空間も緑で被うことで、景観と安全を考えた街並みが形成できる。

3) 小金井市



いつもホッとする長く続く生け垣。この道路は歩道が無いだけに、きれいに刈り込まれた生け垣は、歩行者にはありがたい。



角地のポケットパーク。道沿いが低い植込みになっておりとても見通しがいい。交差点の角地がすべてこういう状況になっていれば、事故が防げる。

4) 国分寺市



開放的でどのかな生け垣。常緑樹と落葉樹のバランスや灌木類の樹種、配置など、家主のおおらかなセンスが光る。



自然石をあしらった生け垣。石組みと庭の高木がすばらしいまちなみをつくっている。道沿いの低い植込みが道度空間を広げている。

5) 多摩市



雑木林風の道沿いガーデン。道路際の植え込みを低くして見通しをよくしている。住民の道沿い緑化が街並みを形成する模範例。



住宅地の生活を考えたまちづくりの模範例。道路と歩道の段差が無く、道路と敷地の境界線も変化がある。その分道路空間が広がっている。

6) 調布市



市民がつくるまちの緑、まちの安全の代表的な模範例タウン。一区画の敷地面積はそれほど広くなく、各戸とも個性的な外構・造園なのに道沿いガーデンタウンとしてまとまっている。



集合住宅沿いの道路。道沿いを雑木林風の緑地帯にしている。歩道側は地被植物を植えて空間を広げている。この道がぶつかる桐朋学園前の道は、歩道の無い危険な道路で対比ができる。

7) 日野市



道路際の植栽帯が安全でやさしい道を形成している。不ぞろいに植えた低木と地被植物が敷地境界を曖昧にしている、画一的になりがちな住宅街に変化をつけている。



玄関ホールをうまく利用した道沿いガーデン。門柱を低くし、門扉をつけなくて玄関前の空間を地域に開放している。一人ひとりがこういう緑をつくると街並みは変わっていく。

8) 府中市



住民の道沿い緑化が街並みを形成する模範例。巧みな造園は、建物の風格を増す。前を通ると中に入りたくなる。



斜面を残し、巧みに庭木を配置した美しい風景。まちを記憶するポイント。子どもたちもこういう風景を記憶して継承していく。

9) 各市の調査員のコメント

各市の調査員からの感想などを次に抜粋します。

- ・ 市内をくまなく、しかも集中的に見て歩いたことで、街が形成された時代や成り立ちによって、その表情が随分違うものだの実感できました。
- ・ 道路沿いに自然発生的に出来上がった既存地域では、なかなか安全緑地の模範例を探すのは難しく、それに比べるとニュータウンのように計画的につくられた街は、歩行者の安全にも景観形成にも当然のことながら良く配慮されていました。
- ・ ニュータウンの中には、道路に無舗装の部分を意図的に残し、その管理を居住者に委ねており、そこが巧みに利用され、庭と一体化しているところもありました。施行者の意図が見事に成功していた事例と言えます。

- ・ 農家の生垣や緑には、都市デザインも太刀打ちできない風格のようなものを感じました。

こうした街の文脈にも配慮しながら、地区全体の風格が増すようなまちづくりを行っていくことが大事になるのだと思います。



稲城市の玉石のよう壁

- ・ 古くから人が住んでいる地域では道路と住宅の境はわりあい閉鎖的なものが多いですが、宅地の中では緑が大きく育っているのが見られます。
- ・ 山を造成した地域では壁の扱い方で街並みの印象がかなり変わります。また、古いブロックなどに蔦が絡んだものなどは風情有ります。
- ・ 建て替えが進んでいる地域では見せるガーデニングが目立ち、街並みが楽しくなりました。
- ・ 市内を歩いてみて、どんなところにも人は緑を植えるものだと感心しました。
- ・ 緑多きまち小金井。今もそう言われるまちが、実際はどうなっているのか、普段はジックリと見る暇のないまちの風景を、この機会に隅々まで見てみよう、そんな気持ちでまちに繰り出した。
- ・ 自然環境の保全・保護の声が大きくなっている昨今も、かなり規模の大きいマンションが増え続け、同じ勢いで戸建て住宅も立ち続けており、古くからある農地や屋敷林などもどんどん減っている。
- ・ 最近できた住宅は、ブロック塀の代わりに生垣や鉢植えがデザイン良く配置されていたり、新しいマンションの一角に昔からあった巨木が残されていたり、学校を嚴重に囲っていた鉄作が緑の垣根に変わっていたりもした。そこには、緑に囲まれた家に住みたい、緑の多い街に住みたい、という住人たちの思いが感じられた。
- ・ 戸建てやマンションには厳めしいブロック塀がそびえ建つものが多く、緑についての意識が高まってきたのはごく最近のことなのだろうか、という疑問も残った。

- ・ 今回の調査の趣旨である「チャイルドパーク」という視点から小金井を見たときに、決して安全とは言えない街角や生垣なども多く、今はまだ、自分の住環境を良くするための緑づくりに留まっているというのが、総体的な感想だった。
- ・ 「まちはそこに住む人たちが育ててゆくものだ」という意識の大切さと、今後のまち育てを改めて考えさせられた。
- ・ 古くからの農家と最近造られた集合住宅（マンション・一戸建て）に多くの緑・オープンスペースが提供されている例が多く、対象を探しやすかった。
- ・ 個人住宅には配慮されている家も多いが、高得点に結び付く所は少ない。どういう点を気を付け、工夫したらよいのか、理想的なモデルが例示されれば、取り組む住民も多いように思う。
- ・ 国分寺では、防災まちづくり学校を設け、地域のコミュニティ作りを進めている。いくつかの自治会は、生垣への更新を進める宣言をするなど活発な活動が行われている。法的な規制だけでなく、住民の発意による個性ある町づくりが行われていけば、面的な広がりをもって暮し易い町ができていくと思われる。
- ・ 国立の美しい大学通りの歩道は、公共が管理する緑地帯と民地の緑によって景観が保たれている。都市の緑化や道の安全は、住民一人ひとりが創出し、保全しなければならない。



国分寺市の見事な生垣

各市の調査員の感想から、既成市街地とその中のマンション、ニュータウンなどの道沿いの緑を含めた景観は、その時代背景も反映していることがわかります。調査の視点を絞り込んでいることも理由に挙げられますが、単なる調査作業にとどまることなく、調査員各人のまちや景観に対する意識の変化を促す契機にもなっていました。

これからの「まち」のゆくえを考えると、生活空間にかかわる、より身近な「緑」と「安全」は大切な要素であり、その保全と確保は大変に重要な課題でもあります。

今後も対象範囲を広げながら、適宜調査を継続していくことで、まちごとの特徴を把握していくことも期待されます。